

日本体育・スポーツ・健康学会
体育哲学専門領域

会報

Vol.25(1), May, 2021

記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 代表挨拶
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 私の研究
- ♪ 箱根合宿研究会情報
- ♪ 定例研究会案内
- ♪ 事務局より
- ♪ 次号予告!

巻頭言

訳書をめぐる雑考と愚案

阿部悟郎（東海大学体育学部）

まずは訳書に感謝しなくてはならない。深い専門的知識と卓越した語学力の賜物である。大いなる敬意。そのうえで、ときおり古典と称される書籍の新訳を目にすることがある。たとえば、アリストテレス全集の新版が刊行されているようである。新版では用語や言い回しがまるで違うことが多い。あたりまえではあるが、新版は旧版との対比においてのみ成立する。もちろん新版あるいは新訳は新たな気づきも喚起してくれる。ああ、そうだったのか、と。そのうえで、訳書が複数ある場合は、つついお気に入りの訳書にこだわってしまう。たとえば、「オデュッセイア」は個人的には土井晩翠訳がお気に入りである。これは好みや趣味の問題かもしれないが、お気に入りへのこだわりは、はたして理解の可能性を拓けているのか、はたまた狭めているのか？

そもそもテキストを読み、それを解釈しようという行為には、どうしてもその人なりの知的背景や趣味が影響してしまう。訳書が出ていない場合は、自らが外国語書籍・論文と向き合わなくてはならない。しかし、語学力の問題もあるにせよ、悲しいことに訳語の選定ひとつとっても、そこにはやはり個人の趣味が影響してしまう。どこまで正しく読めているのか。原著者の本意を逸脱してはいないか。原著者に言わせれば「そんなことは言っていない」と断罪されるかもしれない。ただ、聖書ですら解釈を巡って対立が起きている。このように考えると、極論ではあるが、原典と訳書とは別の書籍と考えた方がよいのだろうか。もちろん原典で読むにこしたことはないのだが。

かなり前に、ある訳書を読み進めながら、どうしてもすんなりと理解できない箇所に遭遇した。全体からすればやや微細な箇所であったが、どうしても気になってしかたがなかった。さっそく、原典にあたるのが常道。訳書の原典を探し出し、すみずみまで対照。やがて、この訳書はある部分が割愛されていることによりやく行き着いた。もちろん、この事情は分からない。政治的判断かもしれない。ただ、この割愛部分をなんとか探索し、それを読み終えた時、バラバラな理解が一つにつながった。「腑に落ちる」という瞬間であった。もちろんあの割愛部分は、一般的には著作の全体理解にはさほど影響しないだろう。そうであれば、あの微細な了解困難な箇所を無視したほうが効率的だったかもしれない。

しかし、効率が全てか。やっぱりあの微細な了解困難な箇所についての理解は、後々、私の拙い研究活動において重要性がどんどん増していった。訳書に全面的に依存し、あの了解

困難な箇所を素通りしていたら、おそらく出会えなかった理解である。訳書に向かうときは、もちろんそれに大いなる信頼を置きつつも、個人的に気になってしかたがない箇所が発生した場合は、それにとことんこだわるべきあるだろう。このこだわりを喚起する瞬間こそ、テキストとの真の出会いであるかもしれない。ここからテキストとの戯れが始まっていく。

おそらくテキストと読み手のあいだに生起する特有の出会いには、テキスト解釈においても有意味であるだろう。これが、テキスト解釈の可能性を拡充してくれるかもしれない。もちろん、それが学問的営為である以上、一定の批判・吟味にとことん堪え残らなくてはならないが、

この意味において、読むという営みは読み手のテキストに対するある種の挑戦であるだろう。了解が困難であればこそ、挑戦が意味を持つ。「不可能の反対語は可能ではない。挑戦である（ジャッキー・ロビンソンでしたね）。」いわく「テキストは動かない。」われわれの知性が動くのである。新版や新訳もそのような知的挑戦であるのだろう。そのうち体育哲学領域においても、マッキントッシュやジグラーなどの新訳なども出るのだろうか。などと愚案しながら、大学の研究室から富士山の遠景を眺めつつ、またしてもお気に入りのあの訳書をめくっている。

阿部悟郎 (gr-abe@tsc.u-tokai.ac.jp)

代表挨拶

代表挨拶

関根正美（日本体育大学）

今年度からの2年間、代表を務めることになりました関根正美です。どうぞよろしくお願い申し上げます。昨年度まで専門領域のためにご尽力いただきました12期役員の先生方にお礼申し上げます。今期の役員の先生方には2年間お世話になります。私からはこの場をお借りしまして、体育哲学をめぐる状況をもとに、いくつか会員の皆様にメッセージをお送りしたいと思います。

体育学会の正式名称が4月1日付けで「日本体育・スポーツ・健康学会」へと変わりました。通称は「日本体育学会」です。体育学会の名称変更問題は、30年くらい前から学会のシンポジウムなどで話題にされてきました。当時大学院生だった私は「単なる名前の問題なのに、なぜ皆さん熱心に議論するのだろう」といぶかしく思っていました。当時の私は愚かだったのです。名称問題が本質や理念と関わることを理解できていなかったのです。この問題が重大な意味を持っていると気づくのは、それからだいぶ後になってからのことでした。

独立の学会ではなく、通称「体育学会」の一専門領域としての本会の位置づけや意義は何なのでしょう。あるいは会員の方が本会に所属している意味は何になるのでしょうか。体育哲学専門領域が、体育、身体運動、スポーツなどの存在根拠や本質を問う従来の姿勢は変わりませんし、そこは変わってはならないところでしょう。通称「体育学会」が現在取り組んでいる分野横断のすべての応用研究部会に本専門領域から委員として出ているのも、この体育哲学の役割を意識してのものです。体育やスポーツ、身体運動に関わる諸科学、諸分野を体育学として基礎づける役割が本専門領域にはあり、原理論の立場から分野横断的な研究への参画が求められていると考えます。初等中等教育における必修科目としての体育、高等教育において教養教育のカリキュラムに位置づけられている体育、人が生涯にわたって幸福に生きるための体育が成立する現場のために、体育の哲学が必要であることは議論の余地はありません。そして、ここに新たなテーマが加わるのかもしれませんが、哲学思想の分野でも、東日本大震災のあとには原発問題について哲学研究者が発言したり本を書いたりすることが出てきました。本来の体育哲学の問題群に加えて、環境問題や人権、テクノロジーといった現代的な課題への対処を体育やスポーツの側から研究として発信していくこと

も求められているといえます。これらの研究動向は、われわれに対して体育哲学のより高い専門性を求めるものです。

昨年度は新型コロナウイルス感染症のために定例研究会をオンラインで行いました。今年度も、場合によっては来年度もこの状況が続くと思われます。研究会で集まらないことは、残念なことです。その一方で、定例研究会のオンライン化によって良い点もあったのではないのでしょうか。その最たるものが、移動に費やすことなく研究会に参加できる点です。飲み会を苦手としている人も参加しやすくなったと思います。物理的にも心理的にも、研究会に顔を出すハードルは下がったといえるのではないのでしょうか。私は2年前の本紙に、やはり代表挨拶として、必ずしも哲学を専門としていない会員の方や会費を納めているだけの方の存在が重要である旨のことを書きました。それは、そもそも「哲学」なるものが専門家に独占される専門知に限らないとの哲学の特徴からしてみれば至極当然の理由によるものです。確かに「哲学」「体育哲学」「スポーツ哲学」の専門的な研究者はおりますし、それらの方々が本専門領域の中核を担っています。それでも体育、スポーツ、身体運動という広く複雑な現象の原理をカバーし尽くすことはできません。会員の皆様には体育学における専門性の度合いに応じて、様々な立場から体育、スポーツ、身体運動に関わる議論に参加していただければ幸いに存じます。

関根正美 (msekine@nittai.ac.jp)

体育哲学考

応用(領域横断)研究部会の発足と専門領域

深澤浩洋 (筑波大学)

(「体育哲学考」にはあまりそぐわない内容であることを始めにお断りしておきますが)百貨店の閉店が続いているという話題を時々耳にします。私が学生時代(特にプロ野球チームの優勝セールの際には)よく通っていた店舗も2017年に閉店し、少し寂しい思いに駆られました。それに影響を与えたのは、大型ショッピングモールでした。広い駐車場を擁し、多くの人々や市外・県外ナンバーの車が集まってきます(週末はその周辺に渋滞が発生し、ちょっと近づく気になりませんが)・・・なぜこんな話題に触れるのかというと、日本体育学会が体育やスポーツ、健康に関する各専門領域といういわば専門店が集まった総合百貨店、諸学問の知のデパートに擬えられるのかなと思ったからです。

ところが、百貨店とショッピングモールとの違いが気になってインターネットで少し調べているうちに(調べるまでもないかもしれませんが)、日本体育学会を百貨店やデパートに喩えるのは少し違うのではと思うに至りました。むしろショッピングモールに近いのではないかと、というのが現在の見立てです。ショッピングモールは、各店舗を収容する複合体であり、この各店舗が各専門領域に相当すると思われる。一方、百貨店(デパートメントストア)は、各商品部門の売り場で構成された集合体になっています。トータルの売り場面積で比べると、ショッピングモールの規模が大きいため、品揃えが充実しているであろうことが想像できます。百貨店の方は、1階が化粧品・アクセサリ、2階婦人用品、3階紳士用品・・・という具合に各テーマ別に商品が陳列されていて、商品をどのようなコンセプトで見せていくか、「編集」するところに百貨店の本質があるという見解もあります。

さて、ご存知のように、今年度の学会大会からテーマ別シンポジウムとテーマ別研究発表が組み込まれます。こちらの方が百貨店のコンセプトに近い形なのかもしれません。この準備を進めるに当たり、本専門領域から選出された会員が5つの応用(領域横断)研究部会のすべてに参画し、シンポジウム企画やテーマ別研究発表のテーマ設定などを他の専門領域の会員と共に進めていただいております。「スポーツ文化」(高尾尚平氏)、「学校保健体育」(高橋浩二氏)、「競技スポーツ」(田井健太郎氏)、「生涯スポーツ」(林洋輔氏)、「健康福祉」(田

中愛氏)の各研究部会に参画いただいております5名の会員の皆様には、昨年秋以降、コロナ禍で様々な制約やご負担が発生する中、オンライン会議などを通じて検討を重ねていただき、シンポジウムと研究発表の枠組みを構築していただくことができました。日頃培われた批判的な視点などを示しながら各テーマの意味づけや課題を掘り下げ、議論を積み上げていただいたものと想像いたします。これらの方々のご尽力に対し、記して感謝申し上げる次第です。

発表をお考えの皆様におかれましては、奮ってテーマ別研究発表での申込みをお願いいたしたく存じます。5つの研究部会の各テーマの多くは、本専門領域にも関連していると思いますし、この体育哲学専門領域での問題の論じ方や物事を根本から考え直すアプローチがこの学会大会に大いに刺激を与え、他の専門領域会員との交流の広がり期待されると思います。同時に、それぞれの研究に対し新たな可能性を見出すことにもつながるのではないかと思います。なお、申し込まれた発表演題について、各研究部会のメンバーで検討し、その中からテーマ別研究発表での発表のお誘いをさせていただく可能性もあります。その際は、前向きにご検討いただけますと幸いです。

このように、新たな企画・発表形式を導入し、本年4月より「日本体育・スポーツ・健康学会」と改称した本学会ですが、これから新たな姿を想像し、併せて体育哲学専門領域の深化・充実に繋がっていくことを期待したいと思っております。

深澤浩洋 (fukasawa.koyo.gu@u.tsukuba.ac.jp)

書籍紹介

小野三嗣 (1993) 『健康づくりのワナ』 朝日新聞社

佐藤 洋 (明星大学)

本務校に着任してから、いわゆる一般教養(本学では全学共通教育という名称)の科目を主に担当している。そのなかに「健康・スポーツ科学論」という座学がある。これを担当するにあたって、「スポーツ」の部分は担当教員の研究領域にある程度委ねられるのだが、「健康」についてはどうしたものかと悩んだ記憶がある。そのような時、本学の大学教授?に「これを読んで参考にしなさい」と勧められたものが、今回紹介する書籍である。

読み進めていくと、なかなか面白い(授業で聞いてもらえそうな)ネタが満載である。管見であると思うが「大学生になっても健康について学ぶの?」「(いま私は)元気だから、あまりすぐには関係ないことなのかな?」と感じる受講生も一定数いると思う。少なくとも私はそうした受講生を想定していたので、まずはどのように食いつかせようか、そして健康にまつわる“一般常識”のようなものをどうやって批判的に捉えさせようかと考えたのである。

前置きが長くなってしまったが、本書は興味が沸くようにタイトル付けられたオムニバス形式で、健康にまつわる「ワナ」シリーズが2ページずつにまとめられている。今回はこれら「ワナ」の一端を紹介させていただき、書籍紹介とみていただければ幸いです。

1. 筋力トレーニングで運動不足の解消はムリ (pp.18-19)

どういうことだと思われるかもしれないが、タイトル通りに「筋トレで運動不足の解消にはならない」のではなく、1日1回、6秒間のアイソメトリック(静的筋収縮)の最大努力に焦点が当てられている。これはボディービル等にも応用されている筋トレ方法で、鍛えたい筋肉に狙いを定めて、例えば10ヶ所に対して最大努力で行うことができれば約1分ではほぼ全身の筋肉を鍛えられるというものである。

しかし、この筋トレの「ワナ」はエネルギー消費量がほとんどゼロだということにある。ラッシュの満員電車で押しつぶされないように、倒されないように踏ん張るのは大変である。確かに、踏ん張ることで筋肉は鍛えられる。しかし、大きな疲労感の割にはエネルギー消費の方は極めて少ないことが実験で確かめられている。

2. 準備運動は神経と筋肉を協調させるため (pp.130-131)

ウォーミングアップをウォーム (温める) だからといって, 文字通りの解釈 (使う筋肉の温度を上げることに執着) をすると一番大切なポイントがぼやける. 本書ではストックホルム王立体育大学オスランド教授の指摘, 「サウナぶろで受動的に体温を温めても, 身体運動によるウォームアップで体温を高めた効果には, はるかに及ばない」ことを引用する.

スポーツ技術に支配的な影響を与えるのは, 神経と筋肉の協調能力である. 準備運動 (ウォーミングアップ) の最大の狙いは, 身体を円滑に働かせるための反復練習である. 例えば重量挙げのスナッチ (単一動作) とクリーン&ジャーク (二段階動作) の試技を想定する. 筋肉の温度だけが問題ならば, 100 キロのスナッチ直後に 100 キロのクリーン&ジャークを行ってよいはずである. だが, 選手たちはスナッチ (単一動作) で 100 キロを挙げた後でも, ジャーク (二段階動作) の前には必ず 2, 30 キロほどの重さで肩慣らしを行う.

ウォーミングアップとは「身体の動きを整える手段」なのであり, 記録はともかく, 「プレーを滑らかにするために行う」ものである.

本書の一端を紹介させていただいたが, 特に運動・スポーツの実施にあたっては私自身も如何に気にせずいたことが多かったのか知ることになった. 今でこそ, 健康づくりの三本柱は運動・栄養・休養であることを承知している. しかし, 学生時代はスポーツをやっているから=私は健康だと思っていた節がある. 運動やスポーツに熱心であった時代を振り返れば, その効果を過大視しすぎていたのかもしれない. そもそも運動やスポーツは, 練習でも試合でもベストコンディションで行うことが古今不易の大原則である. 学生には是非, これら「ワナ」に陥らぬよう知識を得て, 且つ実践の試行錯誤によって, 一人ひとりのための健康づくりの方法をつくりあげてもらいたい.

本稿を書き終えて, 当時は筋肉痛をつくることに熱心だったことを思い出した. 筋肉痛を誇りに思っていたことは, 健康づくりの講義にあたっては内緒にしようと思った.

佐藤洋 (yo.sato@meisei-u.ac.jp)

私の研究

キケローと私

根本想 (育英短期大学)

昨年 of 日本体育・スポーツ哲学会第 42 回大会で「体力不要論者としてのキケロー像再考—『老年について』第 27 節および第 33 節における vires 概念に着目して—」という題目で口頭発表をした. 発表後に「ユニークな研究だ」といったコメントを複数いただいた. コメントの真意はわからないが, 古代ローマの弁論家・思想家であるマルクス・トゥッリウス・キケロー (前 106-43 年; 以下「キケロー」) を中心的な分析対象に据えた体育哲学領域の先行研究がほとんどみられないため, ある意味では「ユニークな研究」なのかもしれないと自分でも少し思う. 本稿では, 私がなぜキケロー研究に取り組むことになってしまったのか, 「私の研究」の舞台裏について語ってみたい.

実をいうと, 私とキケローとの出会いはまったくの偶然であった. 身体教育の原理論を構築する上でスピノザの身体論 (心身並行論ともいわれる) が鍵になると考えていた私は, 『エチカ』を原典で読むために, 仕事の合間を縫って勤務先の高崎から府中まで通ってラテン語を学び始めた. 西洋古典学を専門とする講師の先生からすると, 短大の体育教師が突然自分の生徒になったわけであるから, 内心戸惑っていたことだろう. そんな先生からは文法だけでなく, 古典と向き合う態度を今でも教えていただいている. 何とか原典講読のための最低限の準備が整った頃, 先生は私にキケローの『老年について』から読み始めることをすすめた. 当時は彼が何者であるかさえも知らなかった. 正直に告白すると, その後もしばらくは誕生日が 1 日違いであることに親近感を覚える程度の存在でしかなかった. しかし, 西洋古典学の専門家と一緒に原典講読をする経験が必要だと考え, ひとまず『老年について』と 1

年間向き合ってみることにした。

原典講読を通じて、定年後に古典語を習い始めた二人の学友との出会いもあった。先生と合わせて四人で1年かけて『老年について』の原典を文字通り最初から最後まで読んだ。講読が始まってしばらく経つと、古典語を学ぶ体育教師に興味をもったのか、人生の大先輩である二人の学友から反省会という名の飲み会に誘っていただけるようになった。気づいたら毎週彼らと深夜まで飲みながらさまざまなことを語り合っていた（先生もたまに参加してください）。いわゆる体育会系出身でもなければ、日常的に運動をしている様子もないけれど、彼らにはいつも何かとてつもない力が漲っていた。そうでなければ古稀を祝った後にこんな生活を送ることなど到底できないのではないだろうか。彼らに満ち満ちているこの力は、いわゆる行動体力や防衛体力といったものでは捉えることができないように私には思えた。

そんなことを考えていた時期だろうか。原典講読の際に“vires”（“vis”の複数形）という語がやたらと目につくようになっていた。“vis”という語は複数形で用いられる場合は肉体的な力を一般的に意味するため、“vires”は多くの翻訳で「体力」と訳されてきた。西洋古典学の先行研究では、キケローの“vires”概念を主題に扱った研究は皆無であった。しかし、体育学徒の私にとっては、肉体の老いについて考える上で、この概念が重要な手がかりになると感じていた。というよりも、あの四人で原典と向き合い、飲み語り合う過程で、キケローの“vires”概念は、測定可能な行動体力を指すものではなく、二人の学友に漲っているあの「力」のことではないかと直観した。この頃から、私にとって『老年について』という古典は、ラテン語のお勉強のための一手段から、「私の研究」の分析対象へと変化していった。

このような経緯で私は現在、『老年について』の“vires”概念に着目して、キケローの体力論の再解釈を行っている。この作業を通して、最近では古代ローマ体育思想史研究に新たな可能性を感じつつある。紙幅の関係で詳細を論じることはできないが、今後の「私の研究」で示していきたい。

根本想 (nemoto@ikuei-g.ac.jp)

箱根合宿研究会情報

新型コロナウイルス感染症に伴う今年度の

夏期合宿研究会中止について

大津克哉（東海大学）

この度、新型コロナウイルス感染症が拡大している状況を受け、昨年度に引き続き、箱根での夏期合宿研究会を中止させていただくこととなりました。すでにご準備され予定をたてられていた会員の皆様もおられたと思いますが、感染拡大防止の観点からも現在の状況では中止もやむを得ないとの判断に至りました。

しかし、宿泊を伴う合宿研究会は中止となりますが、当初の日程（1日、もしくは2日間）で、非対面（オンライン）での研究会の開催を検討しています。それによって発表機会が確保されることとなりますので、皆様におかれましては研究活動を続けていただき、今後その成果を公表していただけますようお願い申し上げます。なお、合宿研究会恒例の「大学院生による研究小報告とディスカッション」については企画としてプログラムに予定しています。

今後の研究会開催につきましては、メーリングリストやホームページを通じてお知らせするようにいたします。企画に関するご提案・ご意見をお寄せください。どうぞよろしく願いいたします。

夏期合宿研究会担当 大津克哉 (otsu@tokai-u.jp)

定例研究会

第1回定例研究会のご案内

森田啓（大阪体育大学）

下記のとおり第1回定例研究会を開催いたします。皆様奮ってご参加ください。

日程：2021年6月5日（土）13：00～16：05

オンライン(ZOOMを予定)による開催

注意事項：閲覧情報はメーリングリストで配信します。メーリングリストへの登録をお願いします。会員以外が閲覧する場合は、会員から研究担当にご連絡ください。また参加者は当日実施する出席調査(GoogleFormを予定)に記入をお願いします。

【プログラム】

13：00 代表挨拶 関根 正美（日本体育大学）

13：05 研究発表① 石垣 健二（東海学園大学）

『身体教育と間身体性（不昧堂出版/2020）』：

概要とその周辺：身体的な「われわれ」の獲得としての学校体育

《概要》

本発表では、拙著『身体教育と間身体性—道徳性の礎として—（不昧堂出版/2020）』について概説するとともに、刊行までの周辺状況について報告する。また、そのうえで最終的に、身体的な「われわれ」の獲得（間身体性の教育）として学校体育を位置づけたい。身体的な「われわれ」とは、「身体的な感じ」としてのわれわれという認識であり、それが人間にとって重要な道徳性の礎となる。現在の学校体育は、形骸化した知識や技能の獲得あるいは思考・判断の育成ばかりでなく、身体的な「われわれ」の獲得に向けて変革がもたられよう。

13：50 研究発表② 水島 徳彦（東海大学大学院）、阿部 悟郎（東海大学）

体育・スポーツ哲学において倫理学を「応用」するとは：

ジープの「具体倫理学」の概念に着目して

《概要》

本発表は、応用倫理学として展開されてきた「スポーツ倫理学」そのものを批判的に検討することを目的とする。

体育・スポーツ哲学の研究領域において、スポーツ倫理学は基底詞としての「倫理学」と限定詞としての「体育・スポーツ」という関係から語られてきた。そこで、これまでの体育・スポーツと倫理学に関連する蓄積について、それらの研究の妥当性を追跡しつつ、倫理学が体育・スポーツについて言及し得る可能性と限界について、ジープ、Lの「具体倫理学」の概念をもとに検討する。

14：35 休憩

14：45 研究発表③ 広瀬 健一（法政大学）

コーチの理想言語としての〈指導言語〉の措定に向けた試論：

コーチング場面の事例をもとにして

《概要》

本発表においては、発表者が現在関わっている運動部活動において、コーチが指導言語を使用

する場面を事例として挙げる。事例をもとに、「ある運動の動作を導くための理想的な指導のためのコトバ」=＜指導言語＞の存在について考察を試みる。本発表では、理想言語としての＜指導言語＞の存在を措定した場合、そのコトバはどのように示されるのかについて、コトバの「意味」と「意義」をもとにして検討を行いたい。

15:30 応用（領域横断）研究部会 報告

高橋 浩二（長崎大学）、高尾 尚平（日本体育大学）、田井 健太郎（群馬大学）
林 洋輔（大阪教育大学）、田中 愛（明星大学）、深澤 浩洋（筑波大学）
応用（領域横断）研究部会のミッションと体育哲学専門領域との関わり

＜概要＞

本報告では、応用（領域横断）研究部会の課題や活動内容等を紹介する。本研究部会は、スポーツ文化・学校保健体育・競技スポーツ・生涯スポーツ・健康福祉の5つの部会から構成されている。この区分は、専門領域を横断して取り組むべき実践的（社会的）課題に応じて設けられたものである。各部会では、学会大会等における領域横断シンポジウム及び研究発表を企画・運営している。当日は、1年目のシンポジウムについても報告する。

16:00 副代表挨拶 深澤 浩洋（筑波大学）

【問い合わせ先：研究担当】

森田 啓 hirakumorita@ouhs.ac.jp
高橋 徹 t.takahashi@okayama-u.ac.jp

事務局より

○体育哲学専門領域新体制（第13期 2021-2022）

代表 関根正美
副代表 深澤浩洋
監事 大橋奈希左 上泉康樹
幹事 高尾尚平
編集幹事 神野周太郎
会計／庶務会計 田井健太郎 高橋浩二
研究 森田啓 高橋徹 大津克哉（夏期合宿研究会担当）
企画／大会担当 阿部悟郎 荒牧亜衣 佐々木究
広報／会報担当 石垣健二 釜崎太 田中愛 坂本拓弥
編集／編集担当 荒牧亜衣
学会大会企画運営委員会 荒牧亜衣 佐々木究
選挙管理委員会 波多腰克晃 佐藤洋
規則・規定等整備検討委員会 畑孝幸 高岡英氣

○学会大会について

2021年9月7日から9日かけて開催されます日本体育・スポーツ・健康学会第71回大会は、オンライン形式で開催されることとなっております。また、今回より領域横断テーマ別研究発表が準備されております。大会実行委員会の趣旨にのっとりまして、可能でありましたら領域横断テーマ別研究でのご発表エントリーをご検討下さい。発表時間、発表内容の点から専門領域で発表エントリーいただくことももちろん可能です。

参加予定の方は公式HP等で情報をご確認いただき参加申込み（4/1 9:00-5/18 13:00）をお

願いたいします。

日本体育・スポーツ・健康学会第71回大会ホームページ：
<https://confit.atlas.jp/guide/event/jspehss71/top>

○ 住所等変更及びメーリングリストについて

異動等により、所属先や住所等、会員情報に変更があった方は、日本体育・スポーツ・健康学会事務局 (<https://taiiku-gakkai.or.jp/Inquiry>) にご連絡ください。会員情報は専門領域の名簿とも連動しております。また、専門領域メーリングリスト (talk@pdpe.jp) に登録いただきますと、電子メールによって会報が配信されます。速報性、経済性、専門領域活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げます。こちらに関しては、事務局 (bureau@pdpe.jp) までご一報ください。

○ 事務局の移動について

2021年4月より本専門領域事務局が、敬愛大学(高岡英氣先生)から群馬大学(田井健太郎)に移動いたしました。メールアドレスはこれまで通り【bureau@pdpe.jp】です。庶務会計担当(高橋浩二, 長崎大学)とともに活動します。本領域に関してのご相談がございましたら事務局までご連絡ください。

次号予告!

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は、広報担当：田中 (ai.tanaka@meisei-u.ac.jp) までお問い合わせ下さい。

.....

体育哲学専門領域会報第25巻第1号

発行者 日本体育・スポーツ・健康学会
体育哲学専門領域
関根正美 (代表)

編集者 釜崎 太, 田中 愛, 石垣 健二 (広報担当)

発行日 令和3年5月7日

連絡先 〒371-8510
群馬県前橋市荒牧町4丁目2番地
群馬大学共同教育学部 田井健太郎 気付
電話：027-220-7326

【編集後記】

専門領域の役員が新体制となり、会報担当も新しくなりました。2年間よろしくお願い致します。まずは、年度初めの忙しいの時期にもかかわらず、今号へのご執筆を快くお引き受けくださった先生方に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

まだ気が抜けないコロナ状況下ではありますが、キャンパスには少しずつ学生の声に戻り始めました。対面授業の1回1回が、驚くほど新鮮に、かけがえのないものに思えます。学会大会は安全を期してオンライン開催となってしまいましたが、学会名称変更後、初の大会となります。領域横断の新たな試みも始まります。手探りではありますが、作り上げていく過程で議論が起こり、その積み重ねが共同研究を生み、同時にそれぞれの研究の深化につながることを期待されます。本領域からも積極的に参画していただければ幸いです。(a)